

## 「政治学」

アリストテレス(著) 牛田徳子(訳)  
京都大学学術出版会 2001年2月15日刊

哲学者シモーヌ・ヴェーユは「アリストテレスは、ギリシャにおいて、おそらく唯一の近代的な意味での「哲学者」であり、ギリシャの伝統から完全に逸脱している」と述べている。そしてギリシャ的なのはプラトンであると続けている。ヴェーユのアリストテレスに対する評価を確かめるためには、プラトンの『国家』とアリストテレスの『政治学』を読み比べてみるといい。

これだけの大哲学者を俎上に乗せるのは気が引けるが、プラトンは哲学的課題を語ってはいるが、その内容は一般人でも理解できるように平易であり、語り口も劇作家のそれである。アリストテレスはプラトンおよび同時代のすべての学者と比べても、はるかに分析的、論理的、批判的であり、著作には現代哲学や社会科学の課題に直結するような記述が随所に見出される。

例えば、第1巻は現代の言葉で言えば、経済学について語っているのだが、高利貸しが得る利子や投機的活動によって得られる利益を一般的な財の生産活動と比べて厳しく批判している。これは利子に対してキリスト教やイスラム教が批判を加える前のことである。同じ巻でミレトスのタレスが天文学の知識を使ってオリーブの豊作を予測し、オリーブ搾油機の利用権を買い占めて、収穫期に高い値段でそれを貸し出したことが報告されている。これは歴史上はじめてのオプション取引の実例であるとされているが、アリストテレスがこの史実に関心を引かれなければ現在には伝わっていなかっただろう。

第2巻ではプラトンの共同体所有という概念を批判して次のように述べている。「最大の人数の人に共通なものは、最小の配慮しか得られない。なぜなら人びとは私的なものは、これをもっとも気遣うけれども、公共のものは、これを顧みることが少ないか、各人に割当てられた分しか関心をもたないからである。」これは、私的なインセンティブの重要性の指摘であると同時に共産主義批判にもなっている。

第3巻では、一般に少数の富者が主権をとれば寡頭制と呼ばれ、多数の貧者が主権を握れば民主制と呼ばれるが、「多数の富裕者や少数の貧困者が主権を握る国制をなんと呼んだらいいのか」という思考実験をしている。これは自由と富の分配の問題として深い洞察を与えてくれる。

第7巻では適切な国家規模や国家として必要不可欠のものを討議したり、結婚と子作りについて具体的なアドバイスをしたり、第8巻では教育の公共性を強調している。

本書はどの巻を読んでも、現在われわれが直面している政治、経済、社会の問題に極めて有益な示唆を与えてくれる。おそらく今後2000年たっても古典として残る本であろう。